師匠のグッド・バイ

相談所の裏メニュー

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18475969

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, モ腐サイコ小説100users入り

高級娼婦の師匠がエクボと足抜けしようとする話です。色々な人と師匠が関係しますが、メインはエク霊です。
お好きな方はお付き合いくださいますと嬉しいです。

相談所の裏メニュー

「なぁ霊幻。俺様にも楽しませろよ、裏メニュー」
久しぶりに交渉して借りてきた守衛の身体で、2人きりの霊とか相談所でそう切り出すと、ウザったげに霊幻に睨まれた。
「何のことだよ」
「とぼけんなよ。あるんだろ、この事務所。裏メニューってやつがよ。たまに変な客くるなぁとはおもってたんだよ」
「……」
霊幻は黙って顧客情報の整理を始める。チッ、と思わず舌打ちした。
「俺ぁ見たんだぜ？お前さんが高そうなレストランで、やたら身なりのいい男とメシ食った後、ホテルのカードキー受け取ってたのをな。ありゃ『裏メニュー』関連の客だろ？だーいじょうぶだ、その時一緒にいたシゲオは気付いて無かったから」
はーっ、と盛大にため息をついて、霊幻はガシガシと頭を掻きながら鍵のかかった引き出しを開ける。
そこから四つ折りの紙を広げて指差した。
「Ａコース３０万、Ｂコース５０万、Ｃコース２００万だ」
紙には
Ａ：３０
Ｂ：５０
Ｃ：２００
とだけ書かれている。
その裏メニューを見せられて、俺は目をひん剥いた。ちょっとした高級娼婦の値段じゃねぇか……！
「割引きは一切してない。全部本番あり、フェラあり、ホ別だ。……どうする。今夜なら空いてるぞ」
いつものポーカーフェイスで淡々としゃべる霊幻。
高ぇ〜〜〜！って気持ちと、このチベットスナギツネが、この値段ならどんなことしてくれんだろ……という好奇心が、俺様の中でバチバチと戦う。ええい、どうしても好奇心の方が勝つ。それだけで

生きてるようなもんだ。俺は財布の中を確認した。念のため金を準備してきたが、１０万しか入っていない。いや嘘だろ、そこそこ大金だぞ、１０万って。それが『しか』って。
「手持ちが今１０万なんだが……」
「なら他をあたるんだな。はいこの話はおしまい、ラーメン食って帰るぞ」
「いや待てよ。足らねえ分は必ず明日持ってくる。Ａコースで買わせろ」
「悪いけどウチはツケきかないんで」
「シゲオにバラすぞ」
びくりと霊幻の肩が、ポーカーフェイスのまま揺れる。いつも飄々としてるこいつの弱みを揺さぶるの、楽しいな……。
「……今回だけだからな……絶対明日持ってこいよ」
そう言って霊幻はいつもとは違う携帯を取り出して電話をかけ始めた。
「あ、もしもしマサくん？うんそう、仕事……マサくん来れそう？ほんと？良かった。じゃあいつもの駅で」
ぴ、と電話を切る。
「ケツモチか？」
「そうだよ。ピンでこんな仕事できるわけないだろ」
ケツモチ。要は何かあった時の用心棒だ。娼婦のケツモチならおそらくヤクザだ。しっかりしてんなぁ。このへんはさすが霊幻、個人事業主として成功してるだけはある。
「『俺』を利用するにあたって、いくつか約束して欲しいことがある」
駅に向かって移動を始めながら、霊幻が口を開く。
「あ？」
「俺は今、基本的に新規の客を受け付けてない。だから他の客に紹介しないで欲しい」
ほー、既存客だけで金には不自由してないのか。やるじゃねぇか。
「事務所で、俺しかいない時に、３回言う。『裏メニュー』の出し方も、言わないで欲しい」
……その条件知らなかったわ。たまたまだったのは言わないでおこ

う……。
「支払いは現金のみ、分割は無しだ」
「ちょっと待てＣコースとかどうやってんだ？」
「……ケツモチに６割渡してる。俺の取り分はそんなに無いから、現金の持ち運びには困んねーよ。客側は知らん。工夫しろ。あと領収書だけど、紙面上はマッサージだから経費でほぼ落とせないからな」
「領収書切ってんのかよ！」
「いるか？」
「いや、俺はいい」
「風営許可も取ってるし、名目上はマッサージだよ。店の名前は『れーれん』だ」
「……ほんとしっかりしてんな、お前……」
「あと……相談所の関係者に裏メニューのことを絶対言わないこと。俺以外がいる時に『客』として来ないこと。これを破れば出禁だ。お前の場合、昼間相談所に出入りするのも禁止する」
「……」
大事にしてんのな、霊とか相談所のこと。
「……分かったよ」
「ん。萎えることは先に言っとくが、キスマークとか身体に痕を残すのも禁止な。当然ハードなSMも禁止。言葉責めとかぐらいならいいけど、スパンキングはダメだ。オモチャもいい……って、Ａコースじゃダメだったわ。久しぶりに頼まれたからな、Ａは……結構制約多いけど、我慢しろよな」
？？？
本番ありフェラありで、他に何を制約するってんだ？いまいち分からないが、口を開きかけたところで駅に着いた。ここから隣の市まで移動するらしい。シゲオたちに見つからないようにだろう。
「ホテルは俺の行きつけでいいか？」
「あんま高いところは勘弁してくれよ」
「大丈夫だ、組の息のかかってるラブホだから。割引きもきく」
電車でする会話じゃねぇな。
霊幻はいつものビジネス鞄だけじゃなく、少し大きめのトートバッ

グを持っている。相談所のロッカーに隠すように入れられてた。
……着替えとかローションとか、『仕事道具』を入れてるんだろうか。これからヤるぞ！って感じでエロいな。
「霊幻さん！まいどありッス」
駅に着くと、いかにもな黒のクラウンが俺たちを待ち構えていた。運転手のチャラい茶パツの男が霊幻に挨拶する。
「ん。マサくんも、忙しいのにありがとな」
霊幻は金の入った封筒をチャラ男に差し出す。チャラ男──マサは受け取って金を数え始めた。
「ご新規さんも、どうも」
目を金から離さずマサがおざなりに俺に挨拶する。
「免許証出してくださいね。霊幻さんが写真撮るんで」
車のドアを開けたマサに言われて驚く。トラブル予防のためだろう。が、俺が今持ってるのはこの借りた身体のやつので……どうしたものかな
「マサさん。この人個人情報ＮＧなんだ」
マサを洗脳するか、と思い立った時に霊幻が助け舟を出してくれた。
「な……分かるだろ」
マサは無遠慮に俺を眺めまわし、欠けた耳に目をとめる。
ちいさくため息をつかれた。
「霊幻さん、ウチの組のもんっすか？」
「いや……」
「よその組っすか……」
「それもちょっと言えない」
正確には悪霊だしな。
「俺の方からお帰り願いましょうか？」
「知り合いなんだよ。頼むよ、マサさん。大目に見てくれ」
「……俺はアンタの安全のために言ってるんッスよ？これ以上ヤバい客とってどうするつもりッスか。ケツもってる俺らだって何度怪我人出したか……」
カコッ、カコッ、と車のハザードランプだけが響く。霊幻、そんなヤバい客とってんのか……。

「こいつはそんなんじゃねーよ」
「いつもそう言うんですよ霊幻さんは」
「頼むよ」
「……分かりました。いつもどおり時間になっても出てこなかったら乗り込みますんで」
かち、とマサがシートベルトをする。霊幻もするのに倣って、俺もシートベルトをした。
ホテル街に真っ直ぐ向かう車。
俺はチラッと霊幻を見た。
いつものスーツで頬杖ついて窓の外を見てる男。
……こいつ今、抱かれ待ちなんだなぁと思うと、めちゃくちゃ興奮してきた。
涼しい顔しやがって。みてろよ、３０万円分、喘いでもらうぜ。
俺の視線に気づいた霊幻が、こちらを見て、ふ、と笑う。
──挑発的な目をして。
ごくりと喉が鳴った。
霊幻の薄い唇が弧を描く。それから目が離せない。組み替えた足が、スーツに皺をつけ直す。気のせいか股間が膨らんでるような。
お前も興奮してんのかよ、この淫乱め。最高だ。
俺様は誘われるように霊幻のアゴに手を当てて──。
「着いたッス。ココで待ってるんで」
は、と正気に返った。何だ今の。催眠か……？いやこいつは無能力者だったな。
「マサさん、あんがとな。ほら、行くぞ」
安っぽいラブホの入り口をくぐって、霊幻は慣れた様子でフロントに向かう。一言、二言話して、キーを受け取ってきた。
「行こうぜ」
するりと霊幻の腕が絡んでくる。余りにも自然で、俺様こいつと付き合ってたか？と錯覚しそうになった。
まぁ、面白れぇだろうな、コイツと付き合えば。頭いいし口も上手いし、甲斐甲斐しいし。
……なんというか、その。一発ヤってみるか！と思い立つ程度には、俺様は霊幻を性的に気に入っていた。

それにしても、こう。高級娼婦ってのは催眠が使えるようになんのか……？
さっきからともすれば恋愛方向に思考が移動するのに、俺様は戸惑っていた。
とかく蠱惑的なのだ、霊幻が。
いつもはそんなんじゃねぇだろ、お前……。こんなところでもプロ根性バッチリなのかよ。
エレベーターを降りて、部屋に入る。
「えくぼ」
さっきの車の中での続きをしようとした俺の先手を打って、背伸びをした霊幻がちゅっと可愛らしい音を立ててキスしてきた。
……ほっぺたに。
ちゅっ、ちゅっと何度も頬や鼻、目尻にキスしてくるが、肝心の唇には触れてこない。
いい加減キスさせろ、と焦れたころに、ちゅ、と霊幻が耳にキスしてきてくすぐったさに飛び上がってしまった。
「ごめんなぁ。Ａコースだとキス無しなんだよ」
ぺろ、とそのまま耳を舐められてぞくっとしてしまった。色気のない内容を色気たっぷりのイイ声で言われて、危うく腰砕けになるところだった。情けねぇ。
この世にいて長いが、高級娼婦を買うのは初めてだ。値段には理由があることがヒシヒシと分かってきた。これは気張っていかないと、無様を晒しそうだぜ……。
「準備していくから、先にシャワー浴びててくれ。あ、ここの風呂虹色に光って面白いぞ」
……あ、泡風呂の素があんな。コレで楽しむか。
俺は霊幻をトイレに見送って、ピリっと泡風呂の素の封を切った。

おおお、結構楽しいな、泡風呂。
円形の風呂も、２人で楽しむ用にか広めでゆったりして気持ちいい。
「楽しそうなことしてんじゃねーか」
風呂を楽しんでいると、少しぐったりした霊幻が裸で入ってくる。

頬に差した朱が色っぽい。
「チッ、脱いでんじゃねーよ。あのスーツ脱がせたかったのに」
「あー、悪いな。それもＡコースじゃダメなんだわ」
……いやほんと、意外とあるな、制約。
霊幻はシャワーをひねって、シャカシャカと頭を洗い始めた。ホテル備え付けじゃなくて、持参したシャンプーとコンディショナーを使っている。しっかりしてんなぁ。
「……コッチ来いよ。泡風呂で身体洗ってやるよ」
「んー？ん、ふふ」
あ、またあの顔だ。困ったように霊幻は笑って、バスタブに勢いよく入ってきて……俺をくすぐり倒した。
「だっはっはっはやめろ！くすぐるんじゃねぇ……だははは！」
「ふふ、くくく、へんなかおだな」
「このやろ」
くすぐり返してやると伸ばした手をきゅっと恋人繋ぎにされる。
「ごめんなぁ。Ａコースだとお前からのお触り禁止なんだ」
「……はぁ！？」
「肌を守るためなんだよ。我慢してくれな」
ちゅ、となだめるように霊幻が俺の指にキスをした。
……そりゃあ、３０万ぽっちで傷モノにされたらたまらない、ってのは分かるけどよ……。
泡のついた霊幻の髪から垂れたしずくが、白い肩に落ちる。まろい肩から滑ったしずくが、鎖骨に溜まって。そしてそれが、淡い色をした乳首に──。
触るなと言われると、触りたくなる。人情だ。
「……も、上がるぞ」
俺の視線から逃れるように霊幻が上がる。目の前に細腰。……あれもつかんじゃダメなのかよ、くそっ。
風呂から上がって適当に髪を拭いていると、霊幻がＡＶを流し始めた。
「好みのやつある？フェラする時、そっち見てていいから」
俺様はぽかーんとしてしまった。
「てめぇのその良く回るお口が！俺のを無様に咥えて！ご奉仕して

るのがイイんだろうが！！」
そう言ってＡＶを切ると、次は霊幻がぽかんとする。しばらく経って、じわじわとバスローブの首から赤くなっていって、霊幻は屈辱に顔を背けた。そーそー。そういう顔してろ。よっぽどＡＶよりそそるっての。
「じゃあ……やるな？」
おーおーおー。あの偉そうにふんぞり返ってシゲオや俺様に命令してる所長様が、俺の前に跪いてちんこしゃぶろうとしてらぁ。
……それだけでクるな。
「ん……」
霊幻は口の中をグチュグチュ言わせながら、顎の下を押してる。何してんだ……？
「あ」
ぱく、と半勃ちのソレを咥えられて理解した。唾液でぐちゃぐちゃの霊幻の口内は、まさしく口マンコだった。こいつはそのために唾液を搾り出していたんだ。
「はっ……オイ、てめぇ……」
霊幻が口を動かすたびに熱が尾てい骨まで痺れさせる。右手で幹を擦りながら、空いた手で太ももを揉んでくる。あっという間に完勃ちだ。
それを見て、ずぶぶ。くん、と顎を上げた霊幻が、俺の下生えに鼻を突っ込みながらチンポを喉奥まで飲み込んだ。
……！喉奥の蠕動がやべぇ。
「オイっ、出るって！」
にぃ、としてやったり、と言いたげに霊幻の目が細められて、煽られた。
「……っ、口に出すぞ、」
「ん」
声の振動で亀頭が刺激されて、もう、ダメだった。霊幻の口の中でびゅるると勢いよく放出する。
「……」
霊幻は口に溜めたまま、じっとこちらを見上げてきた。
「……見せろ」

「ん」
かぱ、と霊幻が口を開くと、俺様の精液が糸を引いていて、赤い舌の上ではっきりとその薄黄色さを主張していて。
「……飲め」
「ん」
ごくん、と喉が上下すると、征服感にくらくらした。
「お前のおっきいなぁ。ほら見てくれよ、コレ」
するすると霊幻がバスローブの裾を広げる。
「期待して勃っちまったよ」
頭が爆発したかと思った。
こいつ、俺様のをしゃぶって勃起してやがる……！
出したばかりの愚息が頭をもたげる。オイオイオイ淫乱がすぎるだろ、最高かよ……！
「そろそろ挿れっけど、勃ちそうか？ＡＶでも見るか？それか途中までもっかいフェラする？」
「だからなんですぐＡＶなんだよ。そんなのより、お前がオカズになれよ。こっち来てオナれ」
床に座り込んでいた霊幻をベッドに移動させる。
「おお、分かった」
ベッドに上がった霊幻は、バスローブを寛げて……乳首を触りはじめた。
「は？」
思わず間抜けな声が出る。
「俺が乳首でイくとこ見てて？」
ま　じ　か　よ。
俺はマジマジと霊幻のちんこを見つめてしまう。まだ半勃ちだ。
「ぁっ……っうん、はぁっ……」
イケんのかよ……ホントに……？あ、でも完勃ちになってきた……。
「俺さぁ……乳首いじんの、好きなんだよね……っん、」
エ　ロ　い。
俺にも触らせろ。あ、お触り禁止だったか。くそっ。
捏ねたり弾いたり、きゅ、と摘んだり。霊幻の手で形を変える乳首

から目が離せない。
「あっ、イく」
ぐぐ、と玉が持ち上がって、びゅるっと霊幻は射精した。
「はー、気持ちよかったぁ」
自分の精液で腹を汚した霊幻に、たまらず俺は押し倒した。
が、バンっとベッドを叩いて身体をひねった霊幻にマウントを取られる。
「ごめんなぁ、Ａコースは騎乗位だけなんだ」
俺のちんこを手コキしながら、すまなさそうに霊幻が言う。
……この体格差でひっくり返されたの、マジでビックリした。なんだよコイツ、房中術一級かよ。
「よしよし、もうガチガチだな」
「あーそうだよ。テメェの痴態でガッチガチだよ」
「はは、嬉しいね」
霊幻は手早く俺のちんこにコンドームをかぶせ、数回シゴく。
期待に喉が鳴った。
「ほら、俺ん中、入ってくぜ」
ぐいと腰を上げて結合部を見せつけながら、霊幻が腰を落としていく。
慎ましやかな赤いアナルが無理矢理広げられて、俺のを飲み込んだ。
「ぁ、っ……！」
びくりと震えた霊幻が精液をこぼす。
「ん、ふ……トコロテンしちゃったよ……ほんとスゲぇな、お前の。最高だわ」
〰〰〰っ、腰掴んでゆさぶりてぇ〰！
「動くぞ？」
ぐん、と霊幻が腰をグラインドさせて。
ちんこ引っこ抜かれたかと思った。
ナカの締め付けがヤバい。ウネリがヤバい。吸い付きがヤバい。総じてヤバい。
名器なんてチャチなものじゃねぇぞ、コレは……。
「おいちょっと待っ」

「……あー、ゴム替えるな？」
不甲斐なくも出てしまった俺のをシゴきながら器用に新しいコンドームに取り替える。
俺のは萎えるどころか期待感にすぐガチガチになっていた。
「夜は長いんだからさぁ、ゆっくり楽しもうぜ？」
……いや搾り取ってるのお前だから！！
「ぁっ、ほら、ココ、分かるか？」
俺のを咥え込んだまま、霊幻がぐっと下腹を抑える。やめろって響くから！
「俺のイイ所に当たってんの」
……へーえ。
「えくぼのチンポさぁ、カリが張ってるから、俺の前立腺ゴリゴリ、えぐって、あぁ、ほら、」
びくん、と霊幻が肩をすくめて。
「……イっちゃった♡」
それはもう絶頂の余韻で内部が生き物のようにうねって。
俺は３回目の精を吐き出した。

それから何度も霊幻の中を貪って。
もう出ねーってところまで吐き出して、ようやく俺は霊幻を手放せた。正直今でも抱きしめて余韻を味わっていたい。が、お触り禁止なのでできなくて、歯痒い。
「……メシでも食いに行くか」
「あ、ごめん。Ａコースだとそれも出来ないんだわ」
……流石に苛立ちが隠せなくなってきた。情けねぇが俺はコイツとの情事にハマりつつあった。こんな面白い遊びがあったとは、まだまだ世間は広いもんだ。
「……ちなみにＢは？」
「メシに付き合える、キスできる」
「……Ｃ」
「本気のＣコースは、デートあり着替えあり、お触りあり、体位自由だ。あと、恋人設定もできる」
「……」

俺様もうダメかもしんねぇ……。
Ｃコースが気になりすぎて、２００万をどう都合つけるか考えちまってる……。

※

ラブホの最寄駅までケツモチのマサに送ってもらう。
「あ、今後はもし予約取りたかったらコッチの携帯に電話かメールしてくれよな」
アドレスと電話番号だけが書かれた名刺を霊幻から貰う。
「……また常連増やすんスか？辞めたいんでしょ、霊幻さん」
ぴくりと俺の耳が反応する。いいことを聞いた。
「……まーな。でも仕事は仕事だ。客がいる限り続けるよ」
……上手くやれば、こいつの他の客を蹴散らして、俺様がこの極上のオンナを独り占めできるんじゃねぇか……？

霊幻から見えないようにニヤアっと笑った俺の顔を見て、マサがびくりとタバコを取り落とした。

続